

## 農業共済新聞 千葉版

掲載号	11 月 4 週号	
筆者	所属	農林総合研究センター
	職名及び氏名	研究員 大井田 寛
題名	土着天敵オオメカメムシの利用	
備考	【写真説明】 ヒラズハナアザミウマを捕食するオオメカメムシの成虫	

### 【本文】

最近、化学合成農薬に替わる技術として、天敵昆虫等を商品化した生物農薬が注目されています。これまで、生物農薬の多くは外国産の天敵でしたが、近年は日本に土着している種を用いたものも増えつつあります。千葉県等では、メーカーと共同で土着天敵オオメカメムシを害虫防除に利用するための研究を進めてきました。本種は、難防除害虫のアザミウマ類を対象とした生物農薬として、近い将来商品化され、施設栽培の野菜類で利用可能となる予定です。

オオメカメムシは、施設栽培で問題となる複数種の害虫を食べる体長約5mmの昆虫です。千葉県では5～11月頃に野外の植物上で活動し、成虫で越冬します。野外では多くの植物上に生息し、葉裏等の毛が密に生えた部分に好んで産卵します。また、施設栽培のイチゴ、ピーマン等へ本種の幼虫を放飼すると、アザミウマ類やナミハダニ等の害虫に対して高い防除効果が得られることが明らかとなっています。

天敵で害虫を防除する際には、「害虫を根絶するのではなく、被害が問題とならない程度に害虫の発生を抑制し、その状態を維持する」という考え方が前提条件となります。また、害虫が多発してから天敵を放飼しても、十分な効果が期待できません。栽培初期から花や葉の状態を観察してアザミウマ類の初発生を把握し、発生を認めたら直ちにオオメカメムシを放飼するのがポイントです。

オオメカメムシの実用化により、特にイチゴでは天敵のみで主要害虫のすべてを安定的に防除できる体系が整います。なお、詳しい利用方法等については、販売開始に合わせて配布する「オオメカメムシ利用技術マニュアル」に掲載する予定です。



写真 ヒラズハナアザミウマを捕食するオオメカメムシの成虫